
とある炎の獄炎魔王(I b i l s)

どらごん 5 6 4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある炎の獄炎魔王（I b i l s）

【Nコード】

N9789X

【作者名】

どらごん564

【あらすじ】

悪魔に愛されたが故に、神々に嫌われた上条煉麻。燃え上がる炎のような赤髪に、血のような真紅の目。

学園都市に『使えない』という烙印を押されたその少年は、幻想殺しと呼ばれる稲生を打ち消す力を持った、同じく無能力者（レベル0）の双子の兄だった。

相手の血、または自分の血で自らの身体能力を強化する、『吸血上昇^{ヴァンプア}』、そして、目覚める第二の力。

生まれつき、真っ黒で焦げたかのような左腕を持つ、燃え上がる炎

のような赤髪に血のような真紅の目を持つ少年は、『終焉を呼ぶ者』と烙印を押された犬耳美少女・フェンリルと出会う。

少年は如何様な物語をつむぐのか？

『憂鬱でしかねえよ！』

『諦めろ、兄貴。それが、俺達の運命だ』

『馬鹿言うな、当麻。そんな運命ですらぶん殴る！』

『パクリですか！？上条さんの台詞をお兄さんはパクるというのでせうか！？』

煉麻とフェンリル（前書き）

最近気づいたことがあります。

引用しかしてねえ・・・！

あと、オリキャラは随時更新していきます。

煉麻とフェンリル

カミジヨウレンマ
上条煉麻

身長174cm

体重57kg

性別 男

年齢 16歳

レベル 0

容姿..

燃え上がる炎のようなワックスで立たせた赤髪に、血のように真紅の目を持ち、少し長い八重歯に少し長めの爪が特徴。

左腕には、銀色の腕輪がされている。

左腕が生まれつき、焦げたかのように黒く染まっている。

どちらかという、弟とまったく似ていない（むしろ、煉麻はかなりの美形）。

服装は、襟に金色の鎖がある赤黒い半袖コートにスラックス

モデルは、『コードギアス反逆のルルーシュ』のルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。

性格..

幼少より、双子の弟である当麻を『厄病神』と呼んだ大人や子供達と一人、孤軍奮闘してきた。

血を吸い、自らを強化する『吸血上昇』^{ヴァンプアップ}により、強化された力で傷つけてきた為、『悪魔』、『吸血鬼』と呼ばれ蔑まれてきた。

幼稚園を卒業後、弟とともに学園都市にやってきた。

外見と裏腹に、害なす者以外にならば優しく接する。

要は外見で損してる残念なイケメン。

能力…
ヴァンパイア・コピー
吸血上昇

自分の血あるいは、他人の血を摂取することにより、強大なまでの力を持った偽吸血鬼へと姿を化する。

この状態では、怪力を発揮することが可能で、治癒力も早い。

外見モデルは『野獣のような気品のない吸血鬼』

日没後16分ならば、左腕の範囲でならば、能力を無効化にすることが出来るのか。

？

真っ黒に焦げたかのような、左腕。

名称は未だ不明で、物語で語られる予定。

「日没後16分だけ」能力を無効化に出来るらしいが、本当のところは分からない。

対火性能や、対超電磁砲に備えられているという。

謎の多い能力。

CV；福山 潤

幻想殺しと吸血鬼の兄弟（前書き）

こんにちは。

おはようございます。

こんばんは。

時間帯に合わせて、挨拶です。

この物語は、チートな上条兄がメイン（？）ですな。

幻想殺しと吸血鬼の兄弟

「ええい、クソクソツ！不幸すぎますっ！」

「何を言うか。不幸だというから、不幸なんだ。」

我ながら変態じみた叫び声を上げつつも、上条当麻と少し長めの八重歯を剥き出している、双子の兄・上条煉麻^{かみじょうれんま}はすさまじい逃げ足を止めようとしていない。

深夜の裏路地を走りぬけながら、チラリと背後を振り返ってみる。

八人。

もうかれこれ、2キロ近く走り回っているのに、まだ八人。無論、元外国人部隊のコックさんでもなければ現代まで生き残った機甲忍^{サイバー}者でもない上条当麻にはこの人数相手にケンカしたって、勝ち目はない。

だが、上条煉麻は違う。

「当麻、『アレ』しちゃっていいだろうか」

「ここで、だと・・・？」

上条が許可する前に、煉麻は『壁を滑るように』走る。

「お前の血、貰っとくわ」

煉麻が選んだのは、スキンヘッドのスカジャンを着た男だった。

双子とはいえ、煉麻は上条より身長が高い。

スキンヘッドの男は驚いたことだろう。

まさか、逃げているはずの目の前の二人組のうちの一人がこちらに向かって、走ってくるとはおもわなかったのだろう。

しかも、『鉄分を摂り過ぎている』ため、髪は血のように赤い。

薄汚れたポリバケツを蹴り飛ばし、黒猫を追い払うように上条は走り続ける。

無論、煉麻を放っておいて。

七月十九日。

そう、七月十九日が悪いのだ。明日から夏休みだーっ！などと尋常ではないハイな気持ちになったからこそ、書店では表紙を一目見ただけで地雷だと分かる漫画を手に取り、お腹もすいてないのに一丁豪華に無駄食いするかーっ！（煉麻提案）とファミレスに入り、明らかに酔っ払った不良に絡まれる中学生ぐらいの女の子を見て、思わず助けてやっかなー、とか常軌を逸した思考回路が働いてしまったのだ。

まさか、トイレからぞろぞろ仲間が出てくるとは思わなかった。

集団でー、トイレへ行くのはー、女の子の特権なんだぜ☆（煉麻談）。

「…………結局、頼んでた苦瓜ゴーヤと蝸牛エスカルゴのラザニアくる前に飛び出しちゃったし、まだ食ってもないのに食い逃げ扱いされるし。あーもう何ですかこの不幸は!?!」

ぐぎゃあ!と頭をかきむしりながら、上条は裏路地から表通りへ一気に飛び出す。

そういえば、煉麻は大丈夫だろうか?

さきほど、スキンヘッドの男に『きゅーけつ』するとか。

全く、漫画の読みすぎだ、と上条はため息をつく。

月明かりの降りる『学園都市』は、東京の三分の一ほどの大きさを持つにもかかわらず、どこもかしこもプロペラが青白い月明かりと夜景の光を浴びて独身貴族が流す涙みたいにギラギラ光っている。

上条はカップル達を引き裂くように夜の街を突っ走る。

走りつつ、チラリと自分の右手を見た。そこに宿る力も、こんな状況では何の役にも立たない。

不良の一人も倒せないし、テストの点も上がらなければ女の子にもモテたりもしない。

「うう、不幸だーっ!」

煉麻 side ..

スキンヘッドの不良の血を吸血し、上条煉麻かみじょうれんまの身体能力と新陳代謝は上昇していた。

ヴァンブアップ
『吸血上昇』。

それが、上条煉麻の能力だ。

弟の上条当麻の持つ、幻想殺し《イマジンブレイカー》は『異能の力を打ち消す』。

それは、超能力による火の玉や、カミサマの奇跡ですら消し去る。

煉麻の能力と上条の能力は鼠と猫のようなものだ。

吸血することで、煉麻は八重歯や爪が伸びてバケモノじみたチカラを発することが出来る煉麻。

右手の指先から右手首までだが、能力やカミサマの奇跡を打ち消すことが出来る上条。

煉麻の弱点は、八重歯だ。

弟の上条に幻想殺しの右手で触れられると、上昇は変身解除ダウンし、元の姿に戻ってしまう。

上条の弱点は、右手首までの範囲しか使えないことだ。

兄の煉麻に右手首ではなく、ヴァンパイア『吸血鬼』の姿で首を絞められたりすると、すぐに死んでしまう。

だが、この二人は一度も喧嘩したことがない。

・・・といえば、嘘にはなる。

殴り合いの喧嘩はしたことがない、というのが正しいだろう。

お菓子とか、おかずの取り合いくらいはします。

兄弟だもの。

「おいおい、マジかよ・・・」

不良たちは目を見張る。

彼らは、ケータイを使って増援を呼んできたようだ。

八人ではなく、十五人にまで増えている。

十五対一。

これでは、圧倒的に煉麻は不利だ。

だが、十五人の不良は煉麻の『禍々しい雰囲気』に気圧されている。

十五人の不良は近づきたくないのだ。

この、自分達を『百獣の王』の前に放り出された鼠の気分させる、この少年の近くに。

「へえ、元はといえば、俺の弟が悪いっちゃ悪いんだが、いくらな

んでも、劣勢の俺らを増援呼んでまで、潰したいとおもうかねえ？」

怒りに燃える獅子のごとき、煉麻。

何故怒っているのなんて、不良たちには理解できまい。

煉麻は何度でも思い出してしまうのだ。

『過去』を。

だからこそ、煉麻は学園都市の都市伝説で『赤毛の吸血鬼』と呼ばれようとも、血を吸い続け、不良を殴り倒す。

もう、弟を泣かしたくないから。

「何も言わないってことはよォ、お前らが負けを認めたってことだよなァ！！！！！！」

煉麻の叫び声を聞き、不良たちは我に返ったのか、手に持っていたボールや金属バットを持って煉麻に向かって走り出した。

「相手は一人だ！」

「ぶっ殺せ！」

「あのクソガキを後で殺しに行くんだ！」

かかってきた一人のボールを奪い取り、『吸血鬼』としての腕力で最低限手加減をし、その一人や周りの集団を殴り飛ばす。

そして、背後に回りこんできた金属バットの3人をジャンプして回し蹴りを食らわせて、一掃。

落ちたバットは即座に拾って、三本まとめてへし折る。

まるで、小枝を折るかのように。

不良たちはその様子を見て、

「「バ、バケモノだあああ!!!!!!」」

煉麻にやられなかった不良たちは、散り散りに逃げていった。

煉麻は自分の爪の長い手を見つめて、ポケットに手をつ込み、踵を返した。

・・・それでも、煉麻は『無能力（レベル0）』である。

煉麻 side part 1 end

「く、くそっ・・・やっとな撒いたか」

上条はその場にペタンと座りたくなる衝動を必死にこらえ、夜空を見上げて息を吸う。

本当、誰にも殴らずに問題を片付けられた。

そのことだけは、自分で自分を褒めてやりたい（殴る担当の兄が殴ったのは、紛れもなく兄であることを忘れているようだ）。

「まったく、なにやってんのアンタ。不良を守って善人気取りか、素人気取りですかあ？」

刹那、ぎくりと上条の身体が凍りついた。

鉄橋に灯りの一つもなく、気付かなかったのだ。

兄・上条煉麻かみじょうれんまが服をボロボロにして、こちらに向かって阿修羅のような雰囲気を花って歩いてきているのを見たからだ。

その逆方向からは、灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターという格好の何の変哲もない女の子だ。

上条は夜空を見上げて、あー、また兄貴殴ったのかーと、ぶっ倒れたいなーと半ば本気でおもう。

というか、ファミレスで絡まれていたのが彼女だ。

「・・・つーことはアレだろ？あいつ等が追ってこなくなったのも」

「うん、めんどいから私が焼い（ヤツ）といた・・・といいたいたいところだけど、その不思議特殊メイクの赤毛のお兄さんだよ」

上条はがつくり、項垂れる。

・・・いまも昔も、この煉麻あにが色々、変わらないという事実

Vampire Crow

「・・・というか、コイツ前にはいなかったわよね？」

女の子は特殊メイクを施されたような姿の煉麻をチラリ、と見やる。

鋭い爪。

ダンボールならいとも簡単に突き刺せてしまいそうな、八重歯。

バチン、と青白い火花が響いた。

別に女の子がスタンガンなんていゅー、物騒なものを持ってるわけじゃない。

肩まである茶色の髪が揺れるたびに、まるでソレが電極みたいにバチバチと火花を散らしているのだ。

風に乗ったコンビニ袋が彼女の顔の側に飛んで行った瞬間、迎撃装置の如く青白い火花がコンビニ袋を吹っ飛ばした。

うわあ、と上条は疲れたように一言。

煉麻はまだ吸血鬼もどきの様な姿のまま。

・・・が、どこか人間に戻りつつある。

左半身と右半身がいい具合に戻ってきているせいか、パンキツシュに見えてしまうのは仕方の無い事だった。

そんな兄の様子をチラリ、と見ながら上条は特に気にしないことに

した。

今日は七月十九日。

だから、書店では表紙を見ただけで地雷だと分かる漫画を手に取り、腹も減ってやしないのにファミレスに入り、明らかに酔っ払った不良に絡まれる中学生ぐらいの女の子を見て、思わず助けてやっかない、とか思ってしまったのだ。

けれど、上条は『女の子を助けよう』とか言った覚えはない。

上条と煉麻は不用意に彼女に近づいた『少年達を助けよう』と思っただけだ。

上条はため息をつく。

上条は一ヶ月近く、顔を合わせていて、煉麻は上条から話を聞いただけ。

上条と女の子はお互いに名前すら覚えていない。

友達になろうなんて、全然思っていないからだ。

今日こそは、ボコリまくると鼻息立ててやってくるのが女の子で、それをテキトーにあしらうのが上条である。

たった一度の例外もなく、全戦全勝だった。

テキトーに負ければ、少女の気も晴れるのだろうが、上条は演技下手なのであった。

そして、奇妙なことに『負けず嫌い』な煉麻が居ることに上条は気付いてしまった。

ヴァンプアップ

吸血上昇の詳細は、上条が一番把握している。

一日、16分間。

ありとあらゆる能力を無効化に出来る、という自分の右手と似たような感じだ。
イマジンプレイカー

決定的な違いは、吸血しなければならぬ所。

使い勝手悪いよー、と嘆いているのを聞いたことがある。

「つか、俺の弟がなにしてたってんだよ」

ソレ、俺の言いたかったこと・・・！、と弟の悲痛な表情を軽く無視して、先ほどまで沈黙していた煉麻は言う。

「私は、自分よりも強い『人間』が存在するのが許せないの。それだけあれば、理由は十分」

これだけ。

今日の格闘ゲームのキャラでさえ、『細かい設定』があるというのに。

「けど、アンタの弟も馬鹿にしてるわよね。私は超能力者（レベル5）なのよ？何の力もない無能力者（レベル0）相手に気張ると思

ってんの？弱者の料理法くらい、知ってるわ」

この街の中に限っては、『裏路地の不良Ⅱ暴力最強』という図式に当てはまらない。

超能力開発という時間割り（カリキュラム）からも落ちこぼれた彼らは何の力も持たない無能力（レベル0）の『不』良なのだ。

この街で真に強いのは、彼女の様な特待生クラスの超能力者である。

「あの、それな？お前が何分の一かは忘れたが、才能の持ち主であるのは理解してら。長生きしたかったら、人を見下すのはやめたほうがいいぞ、ホント」

お前にだけには言われたくねーよ、の視線を弟から浴びている本人。だけど、気にしません。

「うっさい。血管に直接クスリ打って耳の穴から脳直で電極ぶっ刺して、そんな変人じみたこととしてスプーンの一つも曲げられないんじゃない、ソイツは才能不足って呼ぶしかないじゃない」

確かに、学園都市はそんな場所。

記録術とか、暗記術とか、そんな名前でごまかして『頭の開発』を平然と時間割り（カリキュラム）に組み込んでいる場所、それが学園都市のもうひとつの顔だ。

大体の生徒は、人間をやめるわけでもない。

脳の血管千切れるまで気張った所で、ようやくスプーンが曲がる程度なのだ。

「スプーン曲げるならペンチ使えばいいし、火が欲しければライター買えばいい。テレパシーなんてなくてもケータイあるだろ。そんなに珍しいもんかねえ、超能力なんて」

と、これは学園都市の身体検査で機械センサーどもに『無能力』烙印押された上条兄弟の言葉。

「大体、どいつもこいつもおかしいんだ。超能力なんて副産物で悦に入りやがって。俺たちの目的って、その先にあるもんじゃなかったっけ？」

対して、学園都市でも七人しか居ない『超能力者』は唇の端をゆがめて、

「はあ？・・・アレね。なんだったかしら、確か『人間にカミサマの計算は出来ない。ならばまずは人滅を超えた体を手にしなれば神様の答えにはたどり着けない』だったっけ？」

少女は鼻で笑う。

「————は、笑わせるわね。一体何が『カミサマの頭脳』なんだか。ねえ、知ってる？解析された私のDNAマップを元に軍用の妹達システムが開発されてるって話。どうやら、目的よりも美味しい副産物だったみたいじゃない？」

と、そこまでしゃべって、唐突に少女の口がピタリと止まる。

音もなく、空気の質が変わっていく感覚。

「・・・ていうか、まったく、強者の台詞せりふよね。」

「「は？」」

「強者、強者、強者。生まれ持った才能だけでチカラをてにいれ、そこに辿り着くまでの辛さをまるで分かっていない——漫画の主人公みたいに不敵で残酷よ。アンタとアンタのお兄さんの言葉」

ざざっざざっざざざ、と鉄橋の下の川面が、不気味なぐらい音を立てる。

学園都市でも七人しかいない超能力者、そこに辿り着くまでにどれだけ『人間』を捨ててきたのか・・・それを匂わせる暗い炎が言葉の端にともっている。

それを煉麻は否定した。

たったの一言で、たったの一度も邂逅したことがなかったというのに。

たったの一度も、自分の誇りを曲げなかったことで。

「おいおいおい。年に一度の身体検査で見てもろよ？俺と当麻の能力ベルはゼロでお前は最高位（レベル5）だ。その辺歩いてるやつに聞いてみな？どっちが強いかなんて、一発でわかんじゃねえか！」

学園都市の能力開発は、薬学、脳医学、大脳生理学などを駆使した、あくまで『科学的』なものだ。一定の時間割り（カリキュラム）を

こなせば才能がなくてもスプーンぐらいは曲げられるようになる。それでも、上条煉麻と上条当麻の双子の上条兄弟は何も出来ない。学園都市の計測機器が出した評価は、まさしく『無』能力だった。

「ゼロ、ねえ」

少女は口の中で転がすように、その部分だけ繰り返す。

一度スカートのポケットに突っ込んだ手が、メダルゲームのコインを掴んで再び出てくる。

「ねえ、超電磁砲^{レールガン}って知ってる？」

「あん？」

「理屈はリニアモーターカーと一緒にね、超強力な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す艦載兵器らしいんだけど」

ピン、と少女は親指でメダルゲームのコインを真上へ弾き飛ばす。

ヒュンヒュン、と回転するコインは再び少女の親指に載って、

「こういうのを言うらしいのよね」

言葉と同時。

音はなく、いきなりオレンジ色に光る槍が上条の頭のすぐ横を――
――貫かなかった。

槍、というよりはレーザーに近い。

出所が少女の親指だと分かったのは、単に光の尾がそこから伸びているのが見えたからだ。

まるで、雷のように一瞬遅れて轟音が鳴り響いた。

耳元で巻き起こる空気を破る衝撃波に、上条のバランス感覚がわずかにずれる。

目の前に立つのは、ヴァンプアップ吸血上昇により、『吸血鬼』と化した煉麻の姿が。

左手には、オレンジ色の槍を持っている。

「な、なによ、コイツ・・・！」

「テメーが人様の弟にそんな物騒なモノむけっからだ。誰だって怒るわ、こんなもん」

少女はたじろぐ。

目の前の八重歯が鋭く、爪の長い男は一体なんなのだと。

「これが、俺の兄ちゃんだよ。」

上条はつい、呆れてしまう。

超能力（レベル5）の雷ですら、素手で受け止めてしまう、兄を。だが、それは決して『素のまま』ではない。

野生の獣のように、産毛が逆立っているのだ。

それが電気を通さないゴム手袋のような、役割を果たしているらし

い。

「で、なんでアンタはそれで傷一つ付いていないのかしら？」

理由は一つ。

幻想殺し（イマジンブレイカー）。

上条の右手に宿る、その力は第二破こそいかないものの、煉麻が押さえきれなかったオレンジ色の槍を消し去っていた。

「まったく、なんなのよ。そんな能力、学園都市の書庫にも載っていないんだけど。私が三十二万八千七百七十分の一の天才なら、アンタとアンタの兄貴は学園都市でも二人きり、229分の一の天災じゃない」

忌々しげに呟く少女に、上条兄弟は答えない。

「そんな例外相手にケンカ売るんじゃない、こっちのレベルを引き上げるしかないわよね？」

「・・・それでいつも負けてるくせに」

上条の幻想殺しは、『異能の力』そのものにしか効果はない。煉麻の吸血上昇ヴァンプアップと似ているようで、似ていないのだ。

（死ぬ！ホントに死ぬ！ホントに死ぬかと思った！ぎゃーっ！）

上条当麻は余裕綽々の顔をビキビキひきつらせていた。

たとえば、光の速度の『電撃の槍』を完全に掴んでしまう『兄』を持

っていても、兄がそこに現れるかどうかは、ほとんど偶然に過ぎないのだ。

内心、心臓をバクバク言わせながら、上条は必死に大人の笑みを取り繕う。

「「なんていうか、不幸っつーか、ついてねーよな」」

上条兄弟はたった一言、七月十九日の終わりをこう締めくくった。

たった一言で、本当に世界の全てに嘆くように。

「「オマエ（オメー）、本当についてねーよ（ついてねーな）」」

兄が会うは、人狼、弟が会うは、銀色シスター

一月二十日から二月十八日生まれの水瓶座のアナタは恋も仕事もお金も最強運！

まったくありえない事にどう転がってもいい事しか起こらないので宝くじでも買ってしろ！

「・・・占い、うぜー。憂鬱にしかならねえ・・・」

赤毛赤眼という、かなり目立つ風貌にドラキュラ伯爵のような襟元が鎖で繋がっている、オシャレな半袖コート。

鎖の色は金色。

半袖コートそのものは、黒っぽい赤。

そんなこんなで、じゃんけんでかなり弱いはずの弟に負けてしまった、弟以上に残念な兄・上条煉麻は食べるものが一切なくなったので（冷蔵庫の中身は全滅、非常食のカップ焼きソバは上条がすべて流してしまった。ちなみに、弟はじゃんけんで負けても買出しにいけない。なぜならば、キャッシュカードを探している間に、踏み碎くという、あるまじきミス。よって、煉麻は負けても買っても買出しに行かなければならないのだ）、炎天下の中、買い出しに行っただけだ。

「くそう、こんなクソ暑い中、風使い（エアロマスター）はずりーや。あいつら、風さえ起こせば、こんな暑さを乗り切れるんだからよ」

かくいう、煉麻は弟の上条と同じく、異能を持っている。

人間の血を摂取することで、とんでもない身体能力と治癒力、更には一日の日没から16分間だけ、ありとあらゆる「異能」を受け付

けない。

しかし、どういうわけか、それは計測器は測ることが出来なかった。おそらく、当麻は補習行く準備でもしてんだろうなー、なんて思っちゃって、暑苦しそうな黒っぽい半袖コートを身に纏い、サンダルを履いた足で帰路についていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。・・・・！」

ベンチでグダ―っ、としていたのは紛れもなく犬耳美少女。

煉麻は、暑さで目もイカレたか？と、真っ赤な目をごしごし、と擦る。

少女の犬耳は、シベリアンハスキーのように黒いというのに、その肌は真っ白で真っ白な髪はショートカットで、ホワイトクリームのショートケーキの上に載っている苺のように、真っ白な髪には赤色のヘアピンがされていて、纏っている服は青を基調とした半袖のセーラー服だ。

「おい、こんなところで寝てる㍡熱中症ですか？」

煉麻は少女を揺さぶる。

ちょうど、この瞬間。

自分の弟が真っ白な修道服の銀髪のシスターさんの少女になんか会っているなんて、知りもしない。

双子と言うのは、奇妙なものだ。

繋がりがすぎていて、逆に恐ろしい。

「・・・・んん。寝すぎちゃったかな？」

半袖のセーラー服を纏う、少し幼そうな黒色犬耳美少女は、目をごしごしと擦りながら、ベンチの上にぺたん、と座り込んだ。

どこか、小動物を思わせるその仕草。

だけど、生まれてこの方、煉麻は動物に嫌われた経験しかない。好かれた動物といえど、鼠や鴉や蝙蝠といった、あまり人には好かれない動物達ばかり。

おかげで、女の子と付き合ったことなんて全くないし、話したことは一言二言くらい。

黒色犬耳美少女は、上目遣いで煉麻を見上げている。

庇護欲を普通は駆られてしまうが、前述の通り、煉麻は動物にあまり好かれたことがない。

だから、どう関わったらいいか分からない。

「ねえ、そのビニール袋の中は何でしゃ？」

「え？ああ、コレか。今日の晩ごはんだよ。つか、お前には関係ないだろ」

突き放したような言い方をすると、犬耳美少女はビニール袋をじいーっと見ている。

煉麻はそれに気付くと、

「ああん？やらねえよ？コレは」

「でも、あたし、君に貰わなかったら、叫んじゃうかもしゃ」

「しゃってふざけてんじゃねえよ……。なんて叫ぶんだよ？」

「そうだねえ、『赤毛赤眼のロリコンに誘拐されそうです！』……って叫んじやいそうじゃ」

黒色犬耳美少女は、『吸血鬼もどき（フェイク・ヴァンパイア）』
としか言えない、煉麻ほど長い八重歯でこそないけれど、少々長い

犬歯を剥き出して、ニコリと笑った。

「・・・ったく。仕方ねーなー、魚肉ソーセージで我慢しろ」

煉麻はビニール袋をがさがさ、と漁るとオレンジ色のラップで包まれた魚肉ソーセージが。

そのパッケージを見たたん、黒色犬耳美少女は魚肉ソーセージを奪い取り、パッケージを乱暴に開けるとがつがつ、と頬張り始めた。その様子は、どこかかつての自分を彷彿とさせる。

自分や当麻おとうとを厄病神と罵り、殴る蹴る石を投げる等の暴行を加える大人や同級生。

いつの日か忘れたが、霊能番組が取材にやってきて、当麻おとうとをバケモノに仕立て上げたこともある。

そんな毎日が嫌で、煉麻は毎日戦っていた。

自分を護るため。

弟を護るため。

戦っていた。

近所に味方が誰もいなくなろうとも、戦うしかなかった。

そんなとき、ボロボロになって家に帰ると、当麻おとうとはいつも泣きそうな顔でこちらを見ているのだ。

自分もボロボロだというのに、心配する当麻が持っていたのは、何故か決まって魚肉ソーセージ。

二人で分け合った後、決まって怒られるのはお約束。

「そういえば、名乗ってなかったかな。あたし、フェンリルって言うしゃ。魚肉ソーセージは、なんて言うの？」

魚肉ソーセージは余計だつーの、なんて呟きながら、煉麻はドサツ、とフェンリルの横に座る。

フェンリルは魚肉ソーセージを食べ終えたらしく、二本目を期待し

ているようだ。

「もうねえぞ。」

「え!?! なんで分かったの!?!」

「当たり前だ。そんな期待してる目で見られたら、誰だって分かるさ。俺は上条煉麻^{かみじょうれんま}。赤毛野郎だなんて、呼ぶんじゃねえよ? 結構、ソレって傷つくんだからよ」

数秒。

いや、25秒間くらいだろうか。

フェンリルは真っ白で細い腕を組み、うーん、と唸る。

そして、フェンリルはがしつ、と煉麻の腕を真っ白で細い腕の両方で掴み、黒色の犬耳の生えている頭を煉麻の肩に置いた。

そして、犬歯をむき出し、幸せそうに、

「じゃあさ、れんれんで決定しや♪」

フェンリルはすりすり、と自分より大きい煉麻の腕に対して頬擦りをしている。

誰にでも優しく、誰にでも甘い、燃えるように赤い髪と血のような真紅の目を持つ煉麻はため息をついた。

「お前、どっか行く所あるのか?」

「ううん、ないよ? どうしたんしゃ? れんれん」

こんな不審者なら、^{ジャッジメント アンチ・スキル}風紀員や警備員が捕まえるはずだ。だけど、捕まらないのにはワケがある。

学園都市の内外の出入りの人間は見張られており、それら全ては記憶されている。

なのに、何故フェンリルは怪しまれないのか？

煉麻の一番の疑問は、それだけだ。

・・・いや、それだけなら一番も何もないのだが。

「この手を取るかどうか迷ったが、仕方ない！」

煉麻はスッ、と突然立ち上がる。

そして、フェンリルに向かって傳く。

おとぎばなし ナイト プリンセス
御伽噺の騎士が姫に向かってそうするように。

「俺のところに来い！」

上条煉麻は御人好しだ。

弟を超えるくらい、御人好しだ。

仮に、『天災』とさえ言われてしまう、チカラを持っていなくても

上条煉麻は上条煉麻だろう。

最初から最後まで憂鬱でしかない、上条煉麻は。

弟より不幸だというのに、煉麻は自分以外の人間のことだけを考えて生きている。

たとえば、今まで縁も所縁もなかつた、その日に初めて出会った他人
としか形容できない少女であつてもだ。

「うん！」

フェンリルは自分の真っ白で小さな手より大きなその手を握る。
握っていないと自分がこの世に存在できない、と言わんばかりに。

自分の男子寮の部屋で何が起こっているかなんて全然知らないまま、燃えるように赤い髪と血のような真紅の目を持つ、御人好しは黒色犬耳白髪ショートセーラー服少女を連れて、寮に戻るのであった。

魔道図書館と終焉を呼ぶ者

上条が学校で補習を受けている間。

煉麻とフェンリルは学生寮に帰宅した。

「ただいまー。」

「うわー、広いっていいのかわかんしゃ！」

「うわー、誰か知らない人が入ってきたよー！」

フェンリルは嬉しそうに走り回ろうとした矢先、純白の修道服を着た小さなシスターさんのような、少女とぶつかってしまった。

お互い、無言で頭を抱えるフェンリルと少女。

その後、二人同時に、

「「君のせいだ！」」

と、同タイミングに二人はお互いを指差した。

そして、二人ともゲラゲラ笑い出した。

どうしたんでせうか、この二人は、と煉麻が部屋に入ってきたときだった。

純白の修道服を纏ったシスターさんのような、少女は、びくびくと震えだした。

「き、君は・・・魔術師・・・!?」

それでも、煉麻は動じない。

『こんな状況』には慣れっこだったからだ。

怖そうな外見ゆえ、第一印象はずっと最悪だった。

おそらく、少女を追っていた『魔術師^{おって}』は煉麻のような格好をして
いるのだろう。

黒っぽい赤。

襟元を留める、金色の鎖が付いていて。

そんな半袖で裾の長いコートを着ていたら、初対面の人間は、誰し
も彼を『能力者』だとは思えないだろう。

本当に、『まほうつかい』と思われていても仕方がないかもしれな
い。

そんな過去を持っていたが故に、煉麻は対処法を知っていた。
こんなときに、どう接すればいいか。

「なんだよ、魔術師って。上条さんは、16年だか15年だか生き
てきたが、そんなもんは見たことがない！」

そして、少女は確信する。

目の前の少年に、魔術師独特の『覇気』が感じられないことに。
だが、別のものを感じ取った。

「・・・^{ヴァンパイア}吸血鬼、か」

「なんか言ったか？」

「ううん！言っていないんだよ！というか、君はさっきの人と似てる
んだよ。兄弟かなにか？」

少女がぽつん、と呟いた言葉。

煉麻はソレを聞き取れこそしなかったけど、『その事』は心に突き
刺さった。

燃えるように赤い髪に、血のような真紅の目。

おとうと

上条とは双子だというのに、似ていなかった。

一度も、似ているといわれたことはない。

家族の誰にも似ていないことに劣等感を感じていた。

だから、少女がいった言葉はすごく嬉しかった。

「そんなもんだよ。」

「そうなんだー。なんか、似てるしね。あ、まずは自己紹介をしなくちゃね。」

「私はね、インデックスって言うんだよ？」

弟なら、そんなの偽名じゃねーか！と突っ込むところ。

だが、今此処には弟は^{ツツコミ}いない。

ツツコミとか、ボケと言ったお笑いに疎い性格（天然と言われる）故か、煉麻は頷いた。

「ほうほう。外国の方だろうか？」

妙に聞き覚えがいたため、純白の修道服を纏う少女――インデックスは呆氣に取られた。

「そ、そうなんだよ。というか、君は驚かないんだね？さっきの人、つまり君の兄弟は、すごいアクションだったのに……。名前はなんていうの？」

俺の名前は、と煉麻が言いかけたときだった。

犬耳美少女フェンリルが煉麻の腰に抱きついて、

「この人は、^{かみじょうれんま}上条煉麻。あたしの王子様で、れんれんって言うんだ

よ、インデックス！」

犬耳美少女フェンリルは、人懐こい笑みを浮かべて、インデックスに手を差し出す。

むろん、煉麻の服を少し引っ張ったまま。

そんな様子にインデックスは一步下がり、

「そ、そんな趣味があるんだ・・・」

と、震えていた。

即座に、煉麻はフェンリルを引き剥がし、床に座らせる。

フェンリルは何が起こったかわからなかったようだが、チョコレートがかかった棒型のビスケットのお菓子を渡されると、嬉しそうにポリポリしていた。

「インデックスもいるか？」

「え？ 私にもくれるの？ どちらかというと、私はご飯が欲しいな♪ れんまが作ってくれた奴」

先ほどまで、煉麻を『変な趣味を持っている奴』と認識していたが、フェンリルに対する接し方を見ると、インデックスは煉麻を信頼してもいい、と思うようになった。

「そうだ、君に話さなきゃいけないかな。ご飯作ってもらうんだし」

「別に話さんでもいいよ。ただ飯食うだけだろ？」

インデックスとフェンリルは二人で戯れていた。

まるで、飼い犬と主人のように。

一方、煉麻はというと。

インデックスとフェンリルと自分の分の昼ごはんを作っていた。自分が買いい物に行っている間に、弟が作っていた生ゴミ同然の野菜炒めではなく、普通の野菜炒めを。

「私はね、魔術結社に所属しているんだよ」

「魔術結社？そもそも、お前、なんで追われてんだ？

追われているのを煉麻が知っているわけは、野菜炒めの下ごしらえをしている時にインデックスが少しだけ話したことだ。

「・・・私は禁書目録だから」
インデックス

「は？」

「私の持つてる、10万3000冊の魔道書。きつと、連中の狙いはそれだと思う」

.....

「ちょっと待て。いくら、ありとあらゆる有り得ない話をこの上条煉麻さんは信じてきたわけですが、これだけは信じれないぞ」

「整理しよう。つまり、本なんだな？」

「うん。エイボンの書、ソロモンの小さな鍵^{レメゲトン}、ネームレス、食人祭祀書、死者の書。代表的なのはこういうのだけど。死霊術^{ネクロノミコン}の書は有名すぎるから亜流、偽書が多いからアテにならないかも」

「いや、本の中身はどうでもいい」

「で、10万冊って——どこに？」

出来上がった野菜炒めを皿に盛り付け、インデックスとフェンリルの前におく。

途端、彼女らはがつつがつ食べ始めた。

「なに？どっかの倉庫の鍵でも持つてるって意味なのか？」

「ううん」インデックスはふるふると首を振って、「ちゃんと10万3000冊、一冊残らず持つてきているよ？」

は？煉麻は眉を潜めて、

「・・・馬鹿には見えない本とかいうんじゃないだろうな？」

「馬鹿じゃなくても見えないよ。勝手に見られると意味がないんだもの」

インデックスの言葉は飄々していて、何故だか馬鹿にされた気がする。煉麻は辺りを見回す。魔道書、なんてかび臭い本はやはり一冊もなく、床に散らばっているのは自分と弟とで集めたゲーム雑誌と漫画と部屋の隅にブン投げた夏休みの宿題くらいだ。

「・・・うわあ」

今まで我慢して聞いていたが、これ以上は無理、と煉麻は絶句する。ひよっとしたら、『誰かに狙われている』というのも単なる妄想なんじゃないだろうかと煉麻は思う。ただの妄想で八階建ての屋上か

らジャンプして、一人で勝手に失敗して、……で、なん
でこの寮の部屋に居るんだ？

「……待て。何故、この部屋に居るんだ？それ以前に。フェンリ
ルは俺が『拾った』から良いけどさ」

フェンリルは箸を振り上げ、猛抗議。
だけど、煉麻の耳には入らない。

「君の兄弟が追い出さなかったおかげなんだよ？」

と、ニコリと笑うインデックス。
フェンリルとインデックスが最後まで食べ終えた時だった。

「ようやく、見つけた……！」

玄関の扉が開く音。

部屋に入り込んだのは、歳は……おそらく、インデッ
クスと同じ十四、五だろう。その高い身長は外国人特有のものだ。
服装は……教会の神父が着ているような、漆黒の修道服。た
だし、コイツを『神父さん』と呼ぶような人間は世界中を探しても
存在しないだろう。

相手が風上に立っているせいか、そこからも甘ったるい香水の匂
いが感じ取れる。

肩まである金髪は夕焼けを思わせる赤色に染め上げられ、左右10
本の指には銀色の指がメリケンのようにギラリと並び、耳には毒々
しいピアス、ポケットから携帯電話のストラップが覗き、口の端で
は火の付いた煙草が揺れて、極めつけには右目のまぶたの下にバー
コードの形をした刺青が刻み込んである。
タトゥー

神父と呼ぶにも、不良と呼ぶにも奇妙な男。

勘と野性の本能を併せ持つ、煉麻は思う。
コイツが、追っ手なんだと。

魔道図書館と終焉を呼ぶ者（後書き）

次回は、上条兄弟VSステイルⅡマグヌスです。
しばらくは、原作を基にした話が続くと思われます。

Perfect Memory Avirity

「てめえ……、ヒトサマの家に上がりこんで、そんなことがよく言えたよなア……」

煉麻の周りの空気が張り詰める。

魔術師は、煉麻のその雰囲気と顔つきを見て、一つの結論に辿り着く。

「……まさか、吸血鬼、なのか？」

魔術師がインデックスと同じようなことを呟く。

すると、魔術師の後ろから女の声がした。

「先ほどから、見ていましたが、どうやら、その少年。吸血して能力値を上げるようです。10億ボルトの雷撃を素手で受け止めているのを見ると、どうやら、『ホンモノ』かもしれません。」

インデックスとフェンリルは顔を見合わせる。

インデックスは、おそるおそる燃えるように赤い髪と血のような真紅の目を持つ少年に話しかける。

「れんま、だよね……？」

だが、煉麻は答えない。

聞こえないのだろうか？

魔術師達は、まだ会話を続けている。

「……変だな。確かに、インデックスとあの少年しか居なかった

はずなんだが……」

「では、私は先に戻りますね」

「ああ、分かった」

すると、女の声は消えた。

魔術師は、サッと煉麻の方に向き直る。

煉麻が振り向くと、インデックスが血まみれになって倒れていた。

（どういことだ？ さっきまで、見てたのは幻……？）

煉麻の表情は無表情のまま。

煉麻が何かについて、思考しているかなんて、魔術師には分からなかった。

（なんなんだ？ 本当に、コイツは人間なのか？ それとも、『カインの末裔』？）

「一体、何が……？」

その声は、上条だった。

人間には、怖いものみたさという、常軌を逸した機能が備わっている。

一步、二歩と思わず前に足が進んだとき、ようやくソレが見えた。

不思議少女インデックスが倒れていた。

・・・プラス、その辺のチンピラなら焼き殺せそうな視線で赤毛でメリケンのように並ぶ指輪、毒々しいピアス、バーコードのようなタトゥー刺青の赤毛の魔術師を睨みつけている兄。

「（なんていうか、肝が据わってるよな……）」

「うん？ うんうんうん？ 嫌だな、そんな目で見られても困るんだけ

どね」魔術師は口元の煙草を揺らし、「ソレを斬ったのは僕じゃないし、神裂だって何も血まみれにするつもりなどなかったんじゃないかな? 『歩く教会』は絶対防御として知られるからね。本来ならあれぐらいじゃ傷もつかないはずだったのさ。・・・まったく、何の因果でアレが砕けたのか。聖^{セント}ジョージのドラゴンでも再来しない限り、法王級の結界が破られるなんてありえないんだけどね」

言葉の終わりは独り言のように、それでいて笑みは消えていた。だが、それでも一瞬。すぐに思い出したように口の端の煙草が小さく揺れる。

「なんで、だよ?」思わず、答えを期待していないのに上条の口は動いていた。「何でだよ。俺は魔術なんて絵^{メル}本^{ベン}信^{シン}じらんねえし魔術^{エム}師^シみてえな生き物は理解できねえよ。それでもお前達にも正義と悪^{アク}ってモンがあるんだろ? 守る物とか護る者とかあるんだろ・・・?」

そんな事、偽善使い（フォックスワード）に言えた義理ではないことはよく分かっている。

上条当麻は、去っていくインデックスをそのまま見捨てて日常に帰ったんだから。

それでも、言わない訳にはいかなかった。

「こんな小さな女の子を、寄ってたかって追い回して、血まみれにして。これだけの現実^{リアル}を前に! テメエ、まだ自分の正義を語ることが出来るのかよ!」

「だから、血まみれにしたのは僕じゃなくて神裂なんだけどね」

なのに、魔術師は一言で断じた。微塵も欠片も、響いていなかった。

「もっとも、血まみれだろうが血まみれじゃなかろうが、回収するモノは回収するけどね」

「かい、しゅう？」意味が分からない。

「うん？ああそうか、魔術師なんて言葉を知ってるから全部筒抜けかと思ってたけど。ソレは君を巻き込むのが恐かったみたいだね」
魔術師は煙草の煙を吐いて、

「そう、回収だよ回収。性格にはソレじゃなくて、ソレの持ってる10万3000冊の魔道書だけどね」

ずっと黙り込んでいる煉麻は思う。

「……また、『10万3000冊の魔道書』かよ。」

「そうかそうか、この国は宗教観が薄いから分からないかもしれないね」魔術師は笑っているのにつまらなさそうな声で、「INDEX—Librorum—Prohibitum——この国では、禁書目録って所か。これは教会が『目を通してだけで魂が汚れる』と指定した邪本悪書じゃほんあくしょをズラリと並べたリストの事さ。危険な本が出回っていると伝令しても、タイトルが分からなければ知らず知らずの内に手に取ってしまうかもしれないからね。————かくして、ソレは10万3000冊もの『悪い本』を抱えた、毒書の坩つぼと化したって訳だ。ああ、注意したまえ。ソレが持つてる本ね、宗教観の薄いこの国の住人なら、一冊でも目を通せば廃人コースは確定だから」

そんな事を言っただって、インデックスは一冊も本を持っていない。あんな身体のラインのはっきり見える修道服なら服の下に隠したって分かるはずだ。大体、10万冊もの本を抱えて人が歩けるはずが

ない。

10万冊って……それは図書館一つ分もあるんだから。

「ふ、ふざけんじゃねえ！そんなの、どこにあるってんだ！」

「あるさ。ソレの頭の中に」

サラリと。魔術師は当然のように答えた。

「完全聞く能力、って言葉は知ってるかな？何でも、『一度見たものを一瞬で覚えて、一字一句を永遠に記憶し続ける能力』だそうだよ。簡単に言えば人間スキャナだね」魔術師はつまらなさそうに笑い、「これは僕達みたいな魔術でも君達みたいな超能力（SF）でもなく、単なる体質らしいけど。彼女の頭はね、大英博物館、ルーブル美術館、バチカン図書館、^{バータブリトラ}華子城遺跡、コンピエーニュ古城、モン・サン・ミシエル修道院……。これら世界各地に封印され持ち出す事の出来ない『魔術書』を、その目で盗み出し保管している『魔道図書館』って訳なのさ。」

「後さ、その犬耳少女。彼女もまた、回収すべき対象なんだ。北欧神話で一度、^{ラケンロク}終焉を起こしたとされる、『終焉を呼ぶ者』^{フエンリル}をその身に宿しているんだ。第一の枷^{レージング}を施しても破ったし、第二の枷^{ドローミ}でも効果がなかった。この子はね、危険なんだよ。使えるものが使っちゃったら、それこそ簡単に世界を支配する事だって可能だ。教会と^{ぼくたち}としては、即急に手を打つために、第三の枷^{グレイブニル}を用いて、閉じ込めることに決めた。だからさ、早めに渡してくれないかな？その子は『そうして』いるだけで、周囲に影響を及ぼすんだ。いわゆる、『魔道兵器』って奴だね」

信じられる、はずがない。

魔道書なんて言葉も、魔道兵器なんて言葉も、完全記憶能力なんて言葉も。

だけど、重要なのはそれが『正しい』かどうかじゃない。こうして、目の前に、実際にソレを正しいと『信じて』少女の背中を切り刻んだ人間がいる事だ。

そして、こんなに幼い女の子を閉じ込めることを平坦な顔で実行すると目の前の敵が言っまじゅつしていているのだ。

煉麻は無意識に、口の中を噛んでいる事に気付いた。

真っ赤で生暖かい血が全身を駆け回る。

自らの血は己に鋭い牙を与えた。

自らの血は己に鋭い爪を与えた。

自らの血は、己に凄まじいまでの強さを誇る『ヴァンパイア・コピー偽吸血鬼』に変えた。

吸血鎧 (Blood Armer) 前編

「ま、彼女自身は魔力を練る力がないから無害なんだけど。その人狼少女も似たようなものかな？」

でも、違いがあるとするならば、『魔術を見ない限り変身できない』点なんだけどね」魔術師は愉快げに口の端の煙草を揺らし、「そんな安全装置^{ストップバー}を用意する辺り、『教会』にもいろいろ考えがあるんだろうね。まあ魔術師の僕には関係ないけど。とにかくその10万3000冊と『一匹』は少々危険な代物なんだ。だから、『使える』連中に連れ去られる前にこうして僕達が保護しにやってきた、って訳さ」

「ほ……、ご？」

煉麻は愕然した。これだけ、真っ赤な光景を前に、この男は今なんつった？

「そうだよ、そうさ。保護だよ保護。ソレらにいくら良識と良心があったって拷問^{ごうもん}と薬物には耐えられないだろうしね。そんな連中に女の子の身体を預けるなんて考えたら心が痛むだろう？」

ガチガチ、と。身体が震えていた。

決して、恐ろしいわけではない。

そして、単純な怒りでもなかった。現に煉麻と上条の腕には鳥肌が立っている。目の前の男の、自分だけは正しいという考え方。自分の間違いが見えないという生き方。それら全てが、まるで何万匹ものナメクジで満たした風呂に突き飛ばされたみたいな悪寒を全身に駆けずり回らせる。

マッドカルト
狂信集団、という言葉がじわりと脳にしみこんでくる。

そんな根拠も理論もない『妄信』^{もうしん}のために人間狩りをする魔術師に頭
の神経がブチ切れて、

「て――メエ、何様だ！
「！」

バギン、と右手が怒りに呼応するように熱を帯びた気がした。

バギンと、牙が怒りに呼応するように熱を帯びた気がした。

地面に縫いとめられていた、二人の二本の脚が、考えるより早く動く。血と肉の詰まった鈍重な体が弾丸みたいに魔術師へ向かう。

上条は右手を、五本の指を粉々に砕く勢いで握り締めて。

煉麻は八重歯を、牙を立てんと大きく剥き出して。

テストの点も上がらない。

女の子にもモテない。

だけど、二人の牙と右手はとても便利だ。

目の前のクソ野郎を殴り飛ばせるんだから。
(煉麻は例外で)

「ステイルⅡマグヌスと名乗りたい所だけど、ここはFortis 931と言っておこうかな」

なのに、魔術師は口の端を歪めて煙草を揺らしているだけだった。口の中で何かを呟いた後、まるで自慢の黒猫でも自己紹介するように上条に告げる。

「魔法名だよ、聞き取れないかな？ 僕達魔術師って生き物は、何でも魔術を使うときには真名まなを名乗ってはいけないそうさ。古い因習だから僕には理解できないんだけどね」

両者の距離は十五メートル。

二人の上条はたった二歩でその距離を半分に縮める。

「Fortis————日本語では強者と言った所か。ま、語源はどうだって良い。重要なのはこの名を名乗りあげた事でね、僕達の間では、魔術を使う魔法名よりも、むしろ————」

さらに二歩、上条当麻は勢いよく通路を駆け抜ける。

兄が視界から消えても、気にならなくなるほど、夢中に。

それでも、魔術師は笑みを崩さない。上条では笑みを消す相手にはならないとでも言うように。

「——殺し名、かな？」

魔術師、ステイルⅡマグヌスは口の煙草を手にとると、指で弾いて横合いへと投げ捨てた。

火のついた煙草は水平に飛んで、金属の手すりを越え、隣のビルの壁に当たる。

オレンジ色の軌跡^{ライン}が残像のように煙草の後を追いつ、壁に当たって火花を散らす。

「炎よ（Kenaz）よ————」

ステイルが呟いた瞬間、オレンジの軌跡^{ライン}が轟^轟！と爆発した。

まるで、消化ホースの中にガソリンを詰めて噴いたように、一直線に炎の剣が生み出される、

じりじりと、写真をライターで炙るように塗装が変色していく。

触れてもいないのに、ただそれだけで目を焼かれるような気がして、上条は思わず足を止めて両手で顔を庇っていた。

ザグン！と上条の足が地面に杭を打ちつけられたように止まってしまう。

ふとした、疑問。

幻想殺し（イマジンブレイカー）はあらゆる『異能の力』を一撃で打ち消すことが出来る。ヴァンブアップ吸血上昇は吸血して、日没後の16分間なら、能力を無効に出来る（日没前なら、掴むくらいだ）。それは、『災害級（レベル5）』と呼ばれる、核シエルターでさえ一撃で破壊しかねない御坂美琴の超電磁砲でさえも例外ではない。

けれど、逆に言えば。

上条と兄の煉麻は未だ、『超能力』以外の『異能の力』を見たことがない。

つまり、試したことがない。

魔術に。

魔術なんていう得体の知れない力に、本当に上条と煉麻の力は通用するのだろうか？

吸血鎧 (Blood Armer) 後編 (前書き)

ぶっちゃけ、吸血鬼キャラが多いような？

吸血鎧 (Blood Armer) 後編

「————巨人に苦痛の贈り物を (Purisa znau piz geb o)」

顔を庇った向こうで、魔術師は笑っていた。

ふと、上条は自らの兄の方を見る。

煉麻は、同じく笑っていた。

余裕げに。

ステイルⅡマグヌスは笑いながら、灼熱の炎剣を横殴りに二人の上条へ叩きつけた。

それは、触れた瞬間にカタチを失い、まるで火山の奔流のように辺り構わずすべてを爆破した。

熱波と閃光と爆音と黒煙が吹き荒れる。

「やりすぎた、かな？」

まさしく、爆弾による爆破事件を前に、ステイルはぼりぼりと頭を搔いた。

ステイルは一応、辺り一体の人の出入りをチェックしている。夏休み初日の男子寮と言う事でほとんどの住人は外に出払っていた。が、友達の居ない弾きこもりが居るとなると少し厄介になる。

眼前は黒煙と火炎のスクリーンに覆われている。

だが、いちいち見なくても分かる。今の一撃は摂氏2000度以上の高熱では『焼ける』前に『溶ける』らしいから、飴細工のようにひしゃげた金属の手すりと同じく、学生寮の壁に吐き捨てたガムのようにべっとりとついていることだろう。

つくづく、あの少年達をインデックスとフェンリルから引き剥がして正解だった、とステイルは息を吐いた。

あそこで傷だらけのインデックスとフェンリルから引き剥がして正解だったとステイルは息を吐いた。

あそこ傷だらけのインデックスを盾にされたら少し厄介な展開にな
っていただろう。

……しかし、これではインデックスとフェンリルを回収でき
ないな。

ステイルはため息をつく。炎の壁を挟んで通路の向こうに居るイン
デックスの元まで歩いていくことは出来ない。通路の反対側に非常
階段でもあればいいが、回り道をしている間にインデックスが炎に
巻かれてしまっただけは笑い話にもならない。

ステイルはやれやれと首を振りながら、もう一度だけ煙の中を透か
し見るように、言った。

「ご苦労様、お疲れ様、残念だったね。ま、そんな程度じゃ100
0回やっても勝てないってことだよ」

「誰が何回やっても勝てないって？空耳じゃねえだろうなア？」

ギクリ、と。炎の地獄の中から聞こえてきた声に、魔術師の動きが
一瞬で凍結する。

轟！と辺り一面の火炎と黒煙が渦巻いていた。

まるで、火炎と黒煙が一箇所に集中するかのよう。

上条煉麻は弟ともに、上条煉麻は羽織っている、襟に金色の鎖が付
いた半袖の裾の長いコートを着てそこに立っていた。

飴細工のように金属の手すりはひしゃげ、床や壁の塗装はめくれ上
がり、蛍光灯は高熱で溶けて滴り落ち———そんな炎と灼熱の地
獄の中、傷一つなく二人の少年はそこに佇んでいた。

「全ッ然びびる事ねえじゃねえじゃん———」

「……、ったく。そうだよ、何をビビッてやがんだ———」

煉麻と上条は、本当につまらなさそうに口の端を歪めて一人で呟いた。

「————インデックスの『歩く教会』をぶち壊したのだって、この右手だったじゃねーか」

「あの中学生の電撃を掴んだのは、このチカラじゃねーか。^{ビリビリおんな}」

「オラ、用意はいいか？当麻」

「兄ちゃんこそ」

正直、二人の上条兄弟には『魔術』なんて言われても何も理解できない。

それがどんな仕組みで動いているものなのか、見えないところで一体何がおきているのか。上条兄弟はきつと一から十まで説明されたって半分も理解できないだろう。

だけど、馬鹿な二人でも一つだけわかることがある。

所詮、ただの『異能』の力だ。

手に掴まれている真紅の火炎は、完全には消滅しない。

まるで、煉麻の身体を取り囲むかのように、綺麗な円を描いてじりじりと蛇のようにとぐろを巻いている。

二人は同時に、

「邪魔だ」

一言。摂氏3000度の魔術の炎に上条の右手が触れ、煉麻が握り

つぶした瞬間、全ての炎が同時に消し飛んだ。
まるで、バースデーケーキに刺さった蠟燭をまとめて吹き消すように。

上条兄弟は目の前の魔術師を見る。

目の前の魔術師は、突然の『予想外』に対し、人間みたいにうろたえていた。

いいや、《これ》は人間だった。

ぶん殴れば痛みを感じるし、一個1000円のカッターで切りつければ赤い血を流す。

ただの、人間だった。

もう二人は、恐怖で足がすくんだり、恐怖で身体が固まったりはしない。

いつものように、手足は動く。

動く！

「————、な」

その一方で、ステイルは目の前の理解不能な現象に危うく一歩後ろへ下がるところだった

周囲の状況を見れば、先に一撃が不発だったとは考えられない。だとすれば、あの少年達は生身の身体で摂氏3000度を受け止めるほどの強度があるのか？ いや、それはもう人間ではない。

上条煉麻と上条当麻はステイルの混乱など気にも留めない。

上条は熱を帯びる右手と、煉麻は妙に黒く染まっている左手を二人共強く握り締めながら、ゆらりとステイルの元へ、一歩。

「チッ！」

ステイルは右手を水平に振るう。生み出される炎剣と同じように、勢いよく叩きつける。

爆発が起きた。火炎と黒煙が撒き散らされた。

けれど、火炎と黒煙が吹き飛ばされた後には、やはり上条兄弟は同じように佇んでいる。

……。まさか。魔術を————？

ステイルは口の中で呟いたが、即座に否定する。こんな魔術はおろか、降誕祭り（クリスマス）を交尾の日デートとしか感じないようなとばけた国に魔術師なんているはずがない。

最も、『異端分子ファンタジック』なのは、あの真っ赤な燃えるような赤髪を持つ、あの変な赤っぽいコートを着ている少年だ。

鋭く伸びた爪に、鋭く伸びた牙。

服の上からで分かり辛いのが、おそらく筋肉で引き締まった体となっていることだろう。

一体、この二人は何者だろうか？

右手で魔術を打ち消す少年。

左手で魔術を握りつぶす、伝承の吸血鬼のような少年。

それに、————それに、魔力なんて持たないインデックスが『魔術師』と手を組めば、そもそも『逃げ出す』必要はどこにもない。それほどまでにインデックスの記憶は危険なのだ。

10万3000冊の魔道書とは、単に核ミサイルを持つのと訳が違う。

生き物は必ず死ぬ、上から落としたリングは下に落ちる、1+1=2……。そんな、世界としては当たり前で、変えようのない『ルール』そのものを破壊し、組み換え、生み出すことが出来る。1+1は3になり、下から落としたリングは上に落ち、死んだ生き物は必ず生き返る。

魔術師達は、その名を魔神と呼ぶ。

魔界の神ではなく、魔術を極めて神の領域まで辿り着いた魔術師、と言う意味の。

魔神。

しかし、目の前の二人の少年からは『魔力』を感じられない。
魔術師ならば、一目で見て分かる。あれには魔術師と言う、『同じ
世界の匂い』がしない。
ならば、何故？

「!!」

ぶるつと。全身に走る震えをごまかすように、さらっと炎剣を出し
双子の片割れに叩きつける。

今度は爆発さえ起きなかった。

煉麻は掴むように左手で炎剣を握りつぶした瞬間、ガラスが碎ける
ように炎剣が粉々に碎け散り、虚空へ溶けるように消えてしまった。
摂氏三〇〇〇度の炎の剣を、何の魔術強化も施していない、生身の
左手（ただし、少し黒くなっている）で、握りつぶした。

「――――、あ」

唐突に。本当に唐突に、ステイルⅡマグヌスの脳裏に何かが浮かぶ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9789x/>

とある炎の獄炎魔王(I b i l s)

2011年11月18日05時35分発行